

ナラティブを軸とした表現による「世界の拡張」についての研究 —思考プロセスを可視化する事例を通して—

A Study on World's Expansion by Narrative Representation —through Examples of Visualization of Thinking Process—

佐藤 隼¹

SATO Jun¹

[要旨] 本稿は、美術科教育における「世界の拡張(自己理解の獲得と他者意識の芽生え)」についての研究の一環として、創作活動での思考プロセス——発想段階・制作段階・完成段階・発表後の各視点から「対話(ナラティブ)」を可視化することで、その内容と関係性を検証していくものである。これまで筆者は、創作活動における社会的実践面を重視するアートプロジェクトに着想を得た学習プログラムを研究開発し、学習者の「語り(ナラティブ)」を通じてその教育効果を検証してきたが、2020年から関わりをもつようになった生徒の作品が美術作品と言語表現の往還を成していることに可能性を感じ、チュートリアル・定性的研究での検証に切り替えてきた。両者に共通する課題は、自ら問いを立て、具体化し、社会的実践へとつないでいく非認知的能力の形成をいかに支え促すか、である。その結果、対話を通して「表現を物語ること」から多様な価値を生むことが明らかとなった。本研究を通じて、学習者の転換に対応した美術科教育のひとつの輪郭を明瞭化する。

[Abstract] This paper is a study on world's expansion (understanding self and raising consciousness of others) in art education. By visualizing thinking process in creative activities from getting an idea, beginning to make a work based on the idea, completing the work to exhibiting it, I here would like to examine the concept and relationship in each phase. So far I have studied and developed learning programs of art project with an emphasis on social practical aspect in creative activity, and investigated their educational effect through learners' "narrative." I have realized on the other hand a potential that works by students I have been involved in since 2020 can be understood as a cross between artwork and verbal expression, and employed tutorial quantitative investigation. What is needed anyway for art projects and "narrative" is how I can support and promote the growth of learners' non-cognitive skills for raising a question, making it clear, and linking the effort to social practice. It has now become clear, as a result, that "telling a story about expression" through dialogue can generate various worth. In this study, I attempt to make clear an outline of art education responding to a change of learning view.

[キーワード] ナラティブ, 対話, 評価, 現代美術, 現代絵画

[Key words] Narrative, Dialogue, Assessment, Contemporary art, Contemporary Painting

[所属] ¹奈良市立一条高等学校 (Nara Municipal Ichijo Senior High School)

[完成] 2023(令和5)年9月

1 はじめに

2021年8月、国立教育政策研究所から「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」が発行された。これを元に、高等学校の芸術科(美術, 工芸)における学習評価についても学習指導要領改訂ポイントを踏まえた学習評価の改善に理解を深め、観点別学習状況の評価に変化していくことが求められている。いわゆる三観点と呼ばれている「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」それぞれの線引きが難しい中で、成果物だけでなく言語表現による省察も有効とされている。一方で、美術科含む実技科目の指導では、課題作品を制作するという授業特性も相まり、

毎時間の確実な学習の定着が可視化できるわけではない。

併せて、学習指導要領の芸術科(美術, 工芸)の目標の柱書を3つに解体する¹と「感性や美意識, 想像力を働かせる」「対象や事象を造形的な視点で捉える」「自分としての意味や価値をつくりだす」となり、造形的な視点をもち、対象や事象を捉え、創造的に考えを巡らせる資質・能力の育成を重視している。これらのことから、総合的に美術の本質に迫る学習が求められていることが分かり、指導者としても更に創意工夫された授業展開が必要となっている。

定期考査等で測ることのできない評価の観点を美術科としてどう評価していくかを考えた時、定性的研究、特に「対話(以降本稿では“ナラティブ”に統一)」を試みそれを可視化することにより、個別最適化の評価へ結び

付けることを試みるようになった。画一的な授業を刷新し、生徒一人ひとりの「個」と向き合う授業をどのようなかたちで展開しようかと考え始めた頃、ある生徒からオンラインで共有されたメモとの出会いがきっかけとなり、これを研究対象に変換が可能という結論に至った。今研究の根幹は、これらの流れを文脈化したものである。

2 研究概要

2-1 本研究の目的

以上の経緯を踏まえ筆者は、美術の評価をより明確に下せるように「ナラティブ」を軸に作品が生成されるプロセスを丁寧に可視化し、自己理解の獲得と他者意識の芽生えを総称した「世界の拡張」を実現することを目的としている。美術の授業では、ゴールは様々であって良いという枠組みがあることに併せ、特に多様化を謳う今日では、美術(芸術全般含む)が先陣を切ってそれを実現していくべきである。この目的を達成する手引として、以下2つの仮説を立てた。

仮説(1)

ナラティブを作品制作の発想段階から取り入れることにより、作品の質が向上するとともに、その作品について言語的な付随が可能となる。

仮説(2)

ナラティブを繰り返すことにより、美術の本質に迫ることが可能となり、更には生き方全体の質が向上する。

上記仮説について本稿では約2年間(高校1年次~2年次)関わってきたAさんの学習記録を借りながら考察する。この生徒を取り上げるのは、彼女の作品や記述には全体的な傾向を捉えつつも、そこから一步踏み込んだ内容が含まれており、今後の展望と課題が明確化しやすいと考えるからである。また「ナラティブ」の定義を、美術教育における「メモやつぶやきを含む“言葉”で語ること、それについて対話すること」とする。

2-2 先行研究

(1) 「文化と社会」の試み、あるいは方法としてのメディアリテラシー教育

今から約10年前、当時奈良女子大学附属中等教育学校(現在は福井大学教授)で社会を教えていた鮫島京一が行なった実践研究²である。「学ぶことは苦しいことだけれども、楽しいことである」。このことをどう生徒につかませるか「文化と社会」という学校設定科目で実践し、生徒のフィードバックを検証した記録として残されてい

る。この研究により、学習集団の形成よりも、一人ひとりの生徒が「自己」を発見し、苦勞しながらも、自分自身を作り上げていく大切さが浮かび上がり、目的はあくまでも、生徒自身による「自己」の発見とそれを磨き上げる方法を自得させることが明らかとなった。

今研究では、鮫島が用いた対話法を下敷きを実施しており、生徒の実直な言葉を抽出することが可能となった。

(2) 芸術は可能か? 再考 —アートプロジェクトを通じた芸術文化の創造—

筆者が2018年より継続している「アートプロジェクト型授業」の研究開発³である。知識・技能の習得に留まらず、資質・能力を形成することを重視する学習指導への転換と軌を一にするように、美術界でも創作活動における社会的実践面を重視するパラダイムへの転換が起こっている。その具体例の一つがアートプロジェクトである。両者に共通する課題は、自ら問いを立て、具体化し、社会的実践へとつないでいく非認知的能力の形成をいかに支え促すか、である。本研究では、この非認知的能力の総体を「リアライズする力」とし、「アートプロジェクト型授業」で学んだ生徒の「語り」を読み解くことを通じて、この力の形成過程を分析した。

今研究は、前回の研究から継続したものであり、より深い「語り→ナラティブ」へと展開する位置づけである。

(3) その他先行研究

2021年度の『美術教育学研究』では、ビジュアル・ナラティブに基づく図画工作科における学習評価の研究が発表⁴され、課題として対話を基にした振り返りを充実させることで、作品中心主義の授業構造からの転換を提起するという、本稿を進めるにあたり大きな後押しとなった研究がある。また最近では「対話(ナラティブ・ダイアログ)」をテーマとした展覧会が開催されるようになり、せんだいメディアテークでは『ナラティブの修復“Restorations of Narrative”』が開催され、今年3月にはその記録集⁵も発行された。そして現在(2022年9月時点)、国立西洋美術館では『自然と人のダイアログ⁶』というタイトルで、絵画展が開催されている。これらからも、対話を重視した美術のあり方を考察する動きを見ることができる。

2-3 方法

研究目的と先行研究を総合して、以下の方法で検証を行なった。

定性的研究を主としているため、今回の対象はAさんの成長過程を可視化するために、ナラティブによる学習記録の集積を研究対象とした。集団ではなく個人のナラ